

「憧れの先生との出会い」

私が憧れる先生に出会ったのは、中学2年生の春だ。A先生は、新任教師でありながら未熟な私達のをがまを全力で受け止めてくれた。どんなに辛く当たっても決して見放すことなく常に生徒の心に寄り添ってくれたのだ。そんな誠実で素朴な人柄に皆、心を開き兄のように慕っていた。また、先生方からも人気があり、職員室はいつも笑い声が絶えず和気あいあいとしていた。私は、先生と過ごした2年間で生徒が必要とする教師とは何かを目の当たりにした。

私が、人生初の挫折を体験した時の話だ。順風満帆であった毎日が、受験を意識した頃から空回りし始める。努力しても結果が出ないことに苛立ちを覚えた。また、周りは皆余裕の表情に見え、一人取り残された孤独感で心が壊れかけていた。この例えようなない感情を全て、尊敬する先生にぶつけてしまったのだ。頭では分かっているが、素直になれない未熟な私。無視や強い口調で反抗したりと酷い態度を取っては自己嫌悪に陥っていた。徐々に体調も崩れ登校することも厳しくなった。

すると、傷つけてしまった先生から声をかけられた。私は、この瞬間を待っていたはずだったが無視してしまう。それでも先生は、翌朝から毎日校門に立ち、笑顔で出迎えてくれた。そんな、ひたむきな先生の姿に心を打たれた。そして、「この先生なら信頼できる。」と確信した私は、胸の内を打ち明けた。先生は、ひたすらうなずき最後に「話してくれてありがとう。」と微笑んだ。見放されても当然の私に対し、こんなにも温かな心で包み込んでくれる先生は他にいない。生徒に対する真剣な思いが、私の心を動かし挫折から立ち直るきっかけを与えてくれたのだ。

先生の愛情深い導きにより冷静さを取り戻した私は、深く反省し自分を分析した。すると、この複雑な感情が何なのかが分かった。それは、等身大の自分を見失い背伸びをしすぎた事だと。これからは、できない事にため息をつくのではなく、できる事の可能性を広げていこうと前向きな気持ちに変わったのだ。そして、この貴重な経験から、中学生が抱える思春期特有の繊細な心を誰よりも理解し心の拠り所になりたいと考えるようになった。この小さな希望は、いつしか「中学校の先生になる」という大きな目標となった。今も私の心は、揺らぐ事なく目標に向かって前進している。

もし、あの時A先生と出会っていなかったら、私は不登校になっていたかもしれない。つまり、先生は生徒に対する対応を間違えれば大変な事態を招く可能性もあるという事だ。

一方、あの時に先生はいったいどんな気持ちで私と接していたのかを聞いてみた。すると、自分自身も初めての事態に戸惑い、様々な本を読みあさり何が正解なのかを模索していたという。しかし、絶対という答えは見つからず生徒の立場になり、今自分にできるこ

とを必死に探したと話してくれた。私は、迷惑をかけた事に対する謝罪と共に、「先生のような教師になる」という熱い気持ちを伝えた。先生は、「ありがとう。約束だぞ。」と照れくさそうに笑った。

中学校最後の文化祭当日、先生は生徒一人一人に手作りのお守りを渡した。また、そこにはメッセージが添えられていたのだ。私達は、そのお守りを握りしめながら感謝の気持ちを込め全力で歌った。しかし、最優秀賞をとる事はできなかった。クラス全員が、先生を囲み悔し涙を流した。そして、先生も泣きながら「皆ありがとう。ありがとな。」と全員の肩をたたいて回った。クラス結成当初は、皆バラバラで問題行動を起こす生徒も多かったが、先生を中心に深い絆で結ばれた私達。いつの日からか、自分で考え自主的に行動するようになった。また、困っている人をクラス全員で助け仲間を思いやる優しい心が育っていた。

学生である以上、勉強が一番だという意見もある。確かに、高校受験という大きな課題は、自分の将来がかかった重要な問題だ。しかし、人が人として生きていく上で、友好的な人間関係を築く事は必要不可欠である。思春期を迎えた中学時代こそ、より多くの人とかわりを持ち様々な経験をするべきだと私は考える。そして、その貴重な経験を活かし、「ストレスに負けないたくましい人間力」を養い成長させる場所、それが学校ではないだろうか。つまり、その重要な役割を担うのが教師であるということだ。

どのような状況においても、決して生徒を見放すことなく温かく包み込む豊かな心。そして、生徒に対する真剣な思いは、やがて生徒の心を動かすことに繋がる。これこそが私の考える「生徒から必要とされる教師」である。